

緑化の原点で学び合う

茨城県桜川市真壁町の筑波山麓

81年前に始まった全国緑化行事という国民運動がありました。その発祥地として語り継がれている第1回植林地で、山道を補修するプロジェクトが展開されています。国民の祝日として、「山の旦」が新たに導入される来年を控え、プロジェクトと、参加した子供たちの体験を紹介します。

荒れた山道の補修に、プロジェクトが始動

広葉樹が混ざる、スギとヒノキの人工林に、チェンソーのエンジン音とともに、子供たちの歓声が響きます。信仰の山として古くから知られる筑波山（標高877[※]）の北麓、茨城県桜川市の鬼ヶ作国有林。「全国緑化行事発祥之地」と彫られた、苔むした石碑が目を引きまします。緑化の国民運動が、ここから全国各地に広がって行きました。

第1回の植林地は、いわば日本の緑化の原点です。しかし、石碑に通じる山道は松枯れによる風倒木が折り重なり、また、イノシシが掘り返し柔らかくなった山道の土壌を大雨がえぐるなど通行できない場所が所々にありました。

そこで、風倒木の撤去や山道を補修

するプロジェクトが、2013年に発足しました。名付けて「全国植樹運動の発祥地を拓く道普請プロジェクト」。枯れ木の伐採や道の補修のほか、森林の大切さと、森づくりに献身した先人の功績を学び、豊かな森林環境を次世代に引き継ぐのが狙いです。

プロジェクトは、第1回植樹を主催した公益社団法人大日本山林会、全国植樹祭を主催する公益社団法人国土緑化推進機構をはじめ、源流部の山村再生活動で知られる東京農業大学と毎日新聞社、筑波山南麓で森林再生活動に取り組みNPO法人地球の緑を育てる会の5団体による共同事業です。

全国森林組合連合会や社団法人全国森林レクリエーション協会、桜川市、茨城県緑化推進機構が共催し、鬼ヶ作国有林を管理する茨城森林管理署が全面協力しています。

これまで、北海道をはじめ、首都圏の各都県や静岡県など、約30の市民団体や企業と地元の住民が参加。風倒木を活用した丸太階段の設置のほか、丸太橋づくりや山道の土留め、草刈り、石碑の掃除などの作業を実施してきました。毎年2回の合同作業と、少人数による調査や作業を3回程度行ってい

ます。

東日本大震災で被災した宮城県南三陸町や福島県川内村の団体も駆けつけ、また、林業女子会のメンバーも一緒に作業に汗を流しました。

通行が困難な山道、延べ700[※]を改修し終え、今年度からは別ルートの補修に着手しています。

危険を伴う山仕事は、様々な人たちによる協力作業です。現場で知り合ったばかりの人たちです。互いに声をかけながら、作業に集中します。特に、男性たちは、女性の声援に発奮します。また、作業に前のめりになる男性を女性が注意し、いさめる場面も見られ、女性の存在は貴重です。



フジツルを着る男の子。自然に力が入ります。



伐倒のやり方を指導する宮林教授(手前)。



林の中にたたずむ石碑には、威厳すら感じさせます。



プロジェクト実施前は、山道の山林は荒廃していました。



みんなで力を合わせて階段づくり



伐倒した木を大人たちと一緒に引き上げる子どもたち。



「森が生きている」。サワガニを見つけ、子どもたちは大喜び

荒廃した国土を背景に、緑化の決意

全国緑化行事がスタートしたのは、1934(昭和9)年。燃料の確保や木材生産などのため森林が伐採され、国内の主要な山々は、はげ山が目立っていました。一方、世界恐慌(1929年)による飢饉暴落などの昭和恐慌に、東北・北海道の大冷害による昭和の大飢饉が追い打ちをかけ、子供の身売りや欠食児童が増え、三陸大津波など災害も重なりました。昭和初期は、森林の荒廃とともに、人心も不安定な時代でした。

そこで、森林と地域の再生を図ろうと、国をあげて取り組んだのが、植林運動でした。疲弊した農山村の人々の現金収入を確保する狙いもあったようです。筑波山麓での第1回植林以降、第二次大戦を挟み、1949年まで東京都や神奈川県で計14回実施。「荒れた国土に緑の晴れ着を」を合い言葉に

1950年に始まった、全国植樹祭に引き継がれました。第1回植樹地は2013年、日本森林学会が100周年を記念して設けた「林業遺産」に選ばれました。

国土の緑化は、経済林の育成や地域環境の整備、保全に止まらず、私たちの心の豊かさにも深く関わっています。作業を通して学びました。

ヤマで磨かれる、「生きる力」

ヤマの作業では、子供たちの工夫や思案に驚かされます。今夏の作業で丸太階段を設け、丸太を固定する杭の長さを手ノコで切りそろえる作業に挑戦した小学5年の男児(東京都世田谷区)。杭といっても、枯れた広葉樹の幹は太さ約7センチ。学校では、工作用の板を手ノコで切ったことがあるそうです。

しかし、簡単に切れてしまう工作用板と違い、山麓の木は節やくぼみがあつて、1本の木でも柔らかい所があれば堅い部分も。「切りにくい所をどうしたらいいか、考えながら切った」そうです。

苦労しただけに、切り終えた時の喜びもひとしお。「やったあ」と手ノコを掲げ、満足そうでした。

また、昨年の合同作業での杭打ちを

終え、昆虫少年の中学2年生(茨城県つくばみらい市)は、さっそく朽ち果てた大木を観察。「虫がどんな場所ですべて生きているのか、工夫して観察するのが楽しい」と話し、「森の中を観察しながら歩き回っていると、授業で習ったリ調べたりした知識が繋がった」と喜んでいました。

男児と同じ世田谷区の小学5年の女児が、スギの木に巻き付いた太さ5センチほどのフジツルを、手ノコで切り除く作業をしていた時です。「ツルに巻き付かれて木も苦しうだけど、ツルだつて生きているから、切ってもいいのか迷う」と戸惑っていました。子供たちにとって、森林作業の現場は生きた学習、命の教育の場になっているようです。



天を仰げば緑のシャワーが降り注ぎます。